

## トマス・アクィナスに於ける能力 (potentia) の概念について

飯塚 知敬

我々にとり能力 (potentia) の概念は身近なものであるが、然しそれが何であり、どの様にして我々の内に在るか、と考へて見ると、それ程明確ではない事に気づく。また、トマスに於ては、彼の独特の存在 (エッセ) の思想と密接に連関しているように思われる。それ故この小論では、我々の受動的な能力 (potentia passiva) たる知性が、トマスに依つて、「知性は魂の或る能力であり、魂の本質そのものたるのではない<sup>(1)</sup>」(necesse est dicere, quod intellectus sit aliqua potentia animae, et non ipsa animae essentia) と言われて居る事を手がかりにして、トマスに於いて能力の概念がどの様な位置に在り、本質やエッセとどの様に関係するかという事の考察を通して、トマスに於ける能力 (potentia) の概念を幾分でも明らかにしたいと思ふ。

### I

「potentia」は、「actus」と対比的に用いられ、様々な意味を有する。トマスに於いても、「能力」の外に多くの意味と、用法を持つて居る。然し、次の2つのものを主要なものとして挙げる事が出来ると思われる。

一つの場合はポテンチアが「可能態」と訳される場合であり、それは「現実態」としてのアクトスに対して用いられる場合である。尚、現実態としてのアクトスには、トマスに於ける重要な区分が在る。即ち、現実態は第一現実態(actus primus)と、第二現実態(actus secundus)とに区分されるのであり、第一現実態とは形相としての現実態であり、第二現実態とは働き(operatio)としての現実態である。<sup>(2)</sup>

ポテンチアのもう一つの主要な用法は、「能力」と訳される場合である。この場合ポテンチアは更に「能動的な能力」(potentia activa)と「受動的な能力」(potentia

passiva) とに区分される。この両者の相違をトマスのテキストから挙げると次のようになる。能動的能力は、対象を現実態におけるものとする能力であり、受動的能力は、現実態において在る対象に依り動かされる能力である事。<sup>(3)</sup> また、能動的能力は他への働きかけの根源であり、これに対して受動的能力は他によって働きかけられる能力であるという事。<sup>(4)</sup> また更に、能動的能力が、動かされるところの者とは異なる者の内に在る運動の根源であるのに対し、受動的能力は、他者から動かされる、ないし受動する事が、それに依って或る者に属する、そのような根源であるという事等<sup>(5)</sup>である。

能動的能力として、トマスが幾度か挙げている例は、「熱くする能力」であり、逆に「熱くされ得る能力」は受動的能力であって、我々の感覚や知性もこれに属する<sup>(6)</sup>。また、この能動的能力と、受動的能力とは、「熱くする能力」と「熱くされ得る能力」とに於ける如く、相互に関係し合って居る。即ち、他へと働きかける者は、それを受け取る者を予想しているし、また逆も成立するからである。

以上に依って我々は、これから主に問題としようとする我々の知性が、受動的能力であり、従って現実態に在る対象に依って動かされ、しかも動かされる者の内に在るものとしての根源である事を見た。また現実態の区分からすれば、知性という受動的能力の現実態たる知性認識 (intelligere) という働き (operatio) は、第二現実態に属する事を見たのである。

ところで、能力の現実態たる働きは、第二現実態であることから、また次のような性格を有している。即ち、働きはエッセと同様、複合体 (compositum) に属すると言われるのである。何故なら、働きは現実態における存在者 (エンス) 以外には属さないからである。従って、第二現実態たる働きは、第一現実態を必ずしも時間的前後関係ではないが、前提として、始めて現実態となるのである。トマスに依れば、「複合体は、実体的形相に依り実体的にエッセを持ち、実体的形相に解う力に依って働く」<sup>(7)</sup>のである。ところで、実体的形相の完全性の種々なるに従い、エンスの本質も異なっている。また、本質は、それに依り、そこに於いて、エンスがエッセを有するところのものである。それ故、第二現実態としての働きは、そのエンスの本質に従って、一定の限定された働きとして在る事になる。例えば、感覚の能力を有する者と、持たない者では、夫々の有する受動的能力に於いて、その受動

の仕方が異なっているのである。トマスに依れば、或る形相が、或る者に受け取られ、その者に変化を生ずる場合、その変化には二通り<sup>(8)</sup>在る。一つは、形相が、「自然的なエッセ」(esse naturale)に従って受け取られる場合であり、例えば、熱という形相が熱せられる者の内に受け取られるような場合である。また、もう一つは、形相が「霊的なエッセ」(esse spirituale)に従って受け取られる場合であり、例えば色の形相が瞳に受け取られるような場合である。トマスは前者を「自然的変化」(immutatio naturalis)、後者を「霊的变化」(immutatio spiritualis)と呼んで居る。そして、この様な受動的能力に於ける程度の相違は、また自らを動かす働き<sup>(9)</sup>の程度の相違と対応する。即ち、認識の能力を持たないエンスにあっては、その者がそれに依り働く形相や、その故に働く目的は、その者の内に本性的に内在するのであり、従って自然本性に依って決定されているのである。これに対して認識能力を有する動物にあっては、それらの運動の根源たる形相は、それらの者に自然本性的に具わっているのではなく、感覚に依り受け取られた形相である。また、人間の場合は、認識された形相を自らの運動の根源とするのみでなく、更に、目的とその手段との対比を認識し、秩序づける理性や知性が備わっている事に依り、自らの働きや、運動の目的を予め設定する事が出来るのである。

かくて、実体的形相に依り、一定の本質に於いてエッセを与えられた被造物は、第二現実態、即ち働きを現実化する訳であるが、その働きは各々の者の本質に依り規定されている。然し、本質に依り規定されていると言っても、その者のエッセと離れて本質という「もの」が在る訳ではない。本質はそのエンスがエッセを分有するその様相であり、その様相が優れたものである程、そのエンスの働きは言わば自発性を高めるのであり、多様なものとなるのである。そして、人間の知性の働きは、地上の被造物の有する働きの中で最も優れたものであり、知性は身体がそれと共同しない如きそれ自体としての働きを有している<sup>(10)</sup>(habet operationem per se)。ところで、如何なる者も、自体的に存立する(per se subsistit)ところの者でなければ、それ自体で働く事は出来ないのであるから、トマスは「知性ないし精神と言われる人間の魂は或る非物体的で自存する者である」と述べているのである。何故なら、トマスに依れば「如何なる者もそのエッセと働きとを同様の仕方<sup>(11)</sup>で持つ」のだからである。

かくて我々は、人間の知性が、地上の被造物の有する働きの内で、最も優れ、それに身体が共同しない自体的な働きを有するという事、それ故、人間の魂は或る非物体的にして自存する者 (subsistens) である事を見た訳である。然し、始めに引用した如く、トマスは人間の魂に於いて、知性はその能力であって、その本質ではない、と述べている。この事の意味を明らかにするために、人間の魂について考察する事にしよう。

## II

トマスに従えば、魂は先ず何よりも人間の一なる実体的形相である<sup>(12)</sup>。そして、魂という優れた形相は、より下位に属する事柄を、ことごとくその力の上で含んでいるのである。それ故、魂という実体的形相に依ってエッセする人間は、その一つの形相に依り、種々なる完全性の段階に従って完成される。即ち、人間は魂という実体的形相に依って、現実態に於けるエンスであり、物体であり、生き物であり、人間たるのであって、その際魂という形相は、本質に従って同一の形相たるのである。そして、この様な実体的形相たる魂に関して、トマスは「可能態において生命を有する自然的物体の第一現実態」というアリストテレスの定義を継承している<sup>(13)</sup>。

また、トマスは、魂は身体の形相であると述べている<sup>(14)</sup>。何故なら、或る者が、それに依り先ず働くところのものが、働きのそれへと帰せられるところの者の、形相たるのだからである。ところで、トマスに依れば、身体が先ずそれに依り身を養い、感覚し、場所的に運動し、同様にして、知性認識するのは魂である。それ故、トマスは魂を身体の形相であるとするのである。

また、トマスは、魂の能力を、自育的、感覚的、欲求的、場所運動的、知性的部門に分け、魂はこれら全ての能力の唯一の根源であると述べて居る<sup>(15)</sup>。然し、魂を基体とするのは知性と意志であり、他の全ての能力は結合体 (coniunctum) を基体としており、従って、知性と意志以外の能力は、身体が減びると共に現実的に存続する事はないのである。

この様なものとしての魂は、それ自身質料と形相との複合として在る事は出来ない。トマスに依れば、魂が身体<sup>(16)</sup>の形相として現実態に在るという事から、可能態としての質料を含むことは出来ない。また知性的魂は、認識される物の形相をその固

有の形相的特質に即して、純粋な仕方<sup>(17)</sup>で認識するのであり、形相がその様な純粋な仕方<sup>(17)</sup>で魂の内に在り得るのは、魂自身が純粋な形相で在る事に依る。何故なら、受け取られる物は、受け入れる者の仕方<sup>(17)</sup>に従って、その者の内に受け入れられるのだからである。

以上我々は、魂が人間の唯一の実体的形相であり、生命の第一の根源として、身体という物体の現実態であり、身体の働きの根源として、その形相であり、全ての能力の根源であり、また知性と意志に関してはその基体である事、更に魂そのものは質料と形相とから複合されたものではない事等を見て来た。ところで、以上の如き魂の特質は、主にその実体的形相の側面から考察されて来た。魂の本質と知性ととの係りを見るために、更に知性ないし知性的魂としての側面から、考察してみる必要がある。

人間の知性は、始めに見た如く一種の受動的<sup>(17)</sup>能力である。それ故、現実態に於いて在る対象に依り動かされる能力である。然し、知性認識の働きは、感覚の働きの如く或る身体的器官の現実態たるのではない。従って、例えば視覚や聴覚の場合のように、可感的なるものの一つの類に対して認識し得るという位置に在るのではなくて、可感的本性全体を普遍的な仕方<sup>(17)</sup>で認識し得るのである。ところで、例えば視覚が色を認識する事が出来るためには、全ての色を欠いているという事が必要である如く、知性は凡ゆる可感的、物体的事物を本性的に知性認識するのであるからして、知性自らは凡ゆる物体的本性を欠いている事が必要である。それ故トマスはアリストテレスに従い「知性は如何なる一定の限定された本性も持たず、全てのものに対して可能的であるという本性しか持たない」と述べているのである。この意味で「魂は或る意味で全てである」(anima est quodammodo omnia)と言われる。

それ故、トマスはまた「人間の知性は、その本質に於いて考察された場合、可能態<sup>(18)</sup>に於いて知性認識する者 (potentia intelligens) として在る」と述べている。受動的<sup>(18)</sup>能力たる知性は、現実態に於いて可知的なものに依り自らが現実化される必要を有する。然るに感覚に対して現存する表象 (phantasma) は、現実態に於ける可知的なるものではない。それ故、やはり魂の能力に属する能動知性に依り抽象され、現実的に可知的なものとされる事を通して、受動知性に受け取られる事が必要である。この様にして、知性は現実態に於ける知性認識する者となる。<sup>(19)</sup>

人間の知性が、こうした意味での受動的能力であるという事が、知性が魂の本質ではない事の主な理由であると考えられる。先ず、知性が現実態になるためには、表象を必要とするのである。ところで、表象は感覚を通して得られるのであるから、身体が身体として完成されて在る事を前提とする。つまり、知性認識の働きは、魂が実体的形相としてその本質に即して現実態に在る事を前提して居る。それ故、働きとしての知性認識は、第二現実態であり、従って第一現実態を前提とするという事が、知性が魂の本質ではない事の理由であると考えられる。また、知的実体としての魂から考えても、知性認識の働きが受動的能力である知性の現実態であるという事、即ち表象から可知的形象を抽象する事に依り始めて現実態となるという事に依って、知性が、知的実体としての魂の本質である事は不可能な事であると考えられる。何故なら、知的実体たる魂は、その本質に於いてエッセするのであるが、然るに知性は常に現実態にあるのではないからである。

以上、実体的形相としての魂の側面と、知性的魂としての側面からの考察を通して、人間の知性認識の働きが、自らが現実態となるために対象を必要とするという事、そしてその対象は始めから魂の内に存在するのではなく、自然的世界の事物から感覚を通して得られるという事、従って知性認識の働きは、第一現実態を前提としており、また常に現実態に在るという事は不可能であるという事、それ故に、知性は魂の本質ではないのだと考えられるという事を見て来た。

そうすると、知性が魂の本質ではなく、能力であるという事は、逆に考えるならば、能力の概念は、対象の概念を前提しており、またその事から第一現実態を、従って、働く者の本質を前提とする概念であり、同時に働く者は、その者の本質に於いてエッセしているのであるから、その者のエッセを前提とする概念であるという事が理解されて来るように思われる。こういった事を手がかりとして、更に検討して見る事にしよう。

### III

知性は魂の本質ではなく能力である。ところで、トマスは力を附帯性 (accidens)<sup>(20)</sup> であると述べて居る。つまりトマスに依れば、実体と附帯性とを「基体の内に存在しない」(non esse in subiecto) という事と、「基体に於いて存在する」(esse in

subiecto) という二者択一的な意味で用いるならば、能力は、魂の本質でない以上附帯性であり、「性質」(qualitas) の第二種に属するのである。然し、附帯性が本質の根源に依り原因されないものという意味で、所謂「五つの普遍」の内の一つとして用いられる場合には、知性という能力は附帯性ではなく、種の本質の根源に依り原因されるものとして魂の本性的固有性 (proprietas naturalis) であり、そうした意味では、実体と附帯性との中間的なものとしてある。そして、トマスは知性としての能力が魂に附帯する過程を次のように述べている。<sup>(21)</sup>つまり、魂は現実態となると附帯性を産出し得るものとなるのであり、知性という能力は魂の本質を根源として、そこから流出して来るのである。そして、先に述べた如く、知性は魂を基体として、これに受け取られるのである。

ところで、この様な魂に対する知性の位置は天使にあっても、その形相と能力との関係に於いて同様である。即ち、知性という能力はその形相に対し、固有の附帯性<sup>(22)</sup>であり、現実態に在る形相に依り産出され、形相を基体とするのである。

人間や天使に於いて、知性が実体的形相に対して、その附帯性であり、形相を基体としてそれに受け取られるという位置に在るという事が、知性が、知性認識する者の本質ではないという事、そして、知性が本質であるのは神のみであるという事の根拠を明らかにするように思われる。

つまり、魂も天使の形相も質料を含まない形相であり、従って質料を含むという意味での可能態性を持たない。然るに、基体は附帯性に対して、現実態に対する可能態<sup>(23)</sup>の位置に在る。魂や天使の形相の有するこの可能態性は、神が純粹現実態 (actus purus) であるのに対して、被造物が被造物として有する可能態性<sup>(24)</sup>である。即ち、被造物はその者の受容力 (capacitas) に依り限界づけられたエッセを分有するのであり、分有されたエッセと形相との複合として、現実態と可能態との複合を有するのである。そして、被造物の有するこの可能態性が、魂ないし天使の形相が知性に対して基体たり得る根拠である。従って、独り神のみが知性を本質とするという事は、被造物がエッセを分有する者であり、従って分有されたエッセが有限であるという事に根拠づけられていると考える事が出来る。

この様な被造物の有する有限性から、能力の概念をもう一度考えて見よう。先に、能力の概念が対象と、働く者の本質とエッセとを前提とする概念である事を見

た。人間にとり知性が能力 (potentia) として在るのは、その物を知性が対象とする自然的事物が、元々人間のエッセと異なる他のエッセに依り自存している物である事、別の観点から言えば、人間の本質が有限で在る事に基づくと言える。或いは、人間が魂に依り知性認識の働きを現実化するその以前に、必ずしも時間的意味ではないが、人間という一定の本質に於いてエッセしている事を前提するという事である。

天使の場合、自己自身を自己の本質に依り、自己以外の事物をその本質に神から付加された形相に依って認識する<sup>(25)</sup>。従って、天使の知性は、人間の知性の如く、外界の事物から感覚を通して得られた表象を抽象する必要がない。それ故、或る限定された意味では、天使は自己自身に依り常に現実態に於いて知性認識していると言われる事が出来る<sup>(26)</sup>。然し、それにも拘らず、天使の知性を、天使の本質ではなく能力 (potentia) であるとしているところのものは、天使の本質の有限性に基づいて<sup>(27)</sup>。つまり、天使の知性はエンス全般に係るのに対し、その本質は有限であり、従って天使は認識のために、神に依り形相に依って完成される事を要したのであり、従って、また、神に依り天使に、認識のために刻印された形象は、天使がそれに依りエッセするところの本質であると言われ得ないという事である<sup>(28)</sup>。

それ故、被造物の知性について語られる能力 (potentia) の概念、元々可能態の意味を合わせ持つところの能力の概念は、全てを自らの本質に依り認識し、知性認識の働きそのものがエッセである神の知性にあっては、その概念の意味するところのものを大きく変える事が必然であったのである<sup>(29)</sup>。

## 註

(1) *S. T. I.* q. 79 a. 1 c.

(2) *De pot.* q. 1 a. 1 c. actus autem est duplex : scilicet primus, qui est forma ; et secundus, qui est operatio :

(3) *S. T. I.* q. 79 a. 7 c. (4) *Ibid.*, I. q. 25 a. 1 c.

(5) *In Met.* V 14 n. 955, 956

(6) トマスは「受動」(pati)について、*S. T. I.* q. 79 a. 2 c. で次の三つを挙げている。

1. 本性的に、ないし固有の傾向性に即して、或る者に適合する物が、その者か



ら取り去られる場合。

2. その者にとり、適合的である無しに拘らず、凡そ何物かが、或る者から除去される場合。
3. 凡そ或る物に対して可能態に在った者が、その物を受け取る場合。

この内、知性の受動は、3に属する。トマスに依れば、本来的な仕方での受動の意味は、1, 2, 3と順に弱まってゆく。

- (7) *S. T. I. q. 77 a. 1 ad 3.* (8) *Ibid., I. q. 78 a. 3 c.*  
 (9) *Ibid., I. q. 18 a. 3 c.* (10) *Ibid., I. q. 75 a. 2 c.*  
 (11) *Ibid., I. q. 75 a. 3 c.* (12) *Ibid., I. q. 76 a. 6 ad 1.*  
 (13) *In De anima II. 1 n 217—229.*  
 (14) *S. T. I. q. 76 a. 1 c.*  
 (15) *Ibid., I. q. 78 a. 1 c.; I. q. 77 a. 8 c.; I. q. 77 a. 5 c.*  
 (16) *Ibid., I. q. 75 a. 5 c.* (17) *In De anima III. 7 n 680, 681.*  
 (18) *S. T. I. q. 87 a. 1 c.* (19) *Ibid., I. q. 79 a. 4, a. 3.*  
 (20) *Ibid., I. q. 77 a. 1 ad 5.* (21) *Ibid., I. q. 77 a. 6 c.*  
 (22) *Ibid., I. q. 54 a. 3.* (23) *Ibid., I. q. 54 a. 3 ad 2.*  
 (24) *Ibid., I. q. 75 a. 5 ad 4; I. q. 77 a. 1 ad 6; I. q. 3 a. 7 c.*  
 (25) *Ibid., I. q. 56 a. 1, a. 2; De Veri. q. 8 a. 8 ad 6.*  
 (26) *De Veri. q. 8 a. 6 ad 7; S. T. I. q. 58 a. 1.*

天使は、自己の本質に関しては、常に現実態に於いて認識している。他の可知的なるものに対しては、知識 (scientia) という能力態 (habitus) は有しているが、現実態に於いて認識していない事があり得る。神的な仕方では、天使に啓示される如き事柄に対しては、知識という能力態そのものに対して可能態に在り得る。

- (27) *S. T. I. q. 55 a. 1 c.* (28) *Ibid., I. q. 56 a. 2 c.; I. q. 54 a. 2 ad 2.*  
 (29) 神に於いては、受動的な能力は一切なく、能動的な能力は無限である。

以上の如く、人間の知性がトマスに依って、魂の本質ではなく、能力であると言われている事の理由を求めてゆくと、エッセそのものたる神に対して、エッセを分有する者としての被造物の有限性に到達した。その有限性の内にこそ、被造物に於ける能力の概念、可能態という意味を含むものとしての能力の概念が最終的に成立していると考えられる。然し、反面、我々の知性を、(また天使の知性を) 無限性への可能性を有するものとして見る場合には、我々の分有するこの有限なエッセこそ、魂という形相に、身体と共同しない如き独自の働きを成立させた根拠として在るという事が考えられて来る。その意味

で、トマスに於ける能力の概念の理解は、被造物の有する有限性と、無限性への可能性という二面性を踏まえつつ、しかも、統一的に把握するトマスのエッセの解明と切り離す事が出来ない。具体的には、人間に於ける心身の合一の問題へとつながってゆくであろう。この小論に於いては、トマスに於ける能力の概念が、どのような位置に在るかという見通しを得た事で満足しなければならない。